

明治家 実業列伝 28

伊澤平蔵

仙台市博物館 市史編さん室長 菅野正道



造り酒屋の富

江戸時代、豪商と言えば呉服商と両替商が双璧で、米問屋や材木問屋、廻船問屋(海運業)あたりが続く、というのが相場でした。しかし、幕末前後から、そうした傾向に変化が生じます。実力ある豪商の本業に多様性が見られるようになるのです。その有力な業態の一つが酒造業(造り酒屋)でした。

江戸時代の酒造業は厳しい統制下にありました。酒造の権利を得るためには多額の金銭が必要で、権利を得ても様々な制約があり、不作の年には酒造を禁止されることもしばしばでした。また酒造業は、仕入れから販売までの時間が長く、製造時期も限られるなど、経営面のリスクも少なくありませんでした。しかし、そうしたことを補って余りある利益が出たので、仙台藩領でも藩に献金



大正時代の伊澤商店全景

して酒造を許可してもらおうとする新興の豪商・豪農が次々と現れました。幕末、財政難にあえぐ仙台藩は、彼らに酒造を許すことで多額の収入を得る政策を採ったのです。

御軍用酒屋から

江戸時代の仙台城下において、造り酒屋というと、藩用の酒を造る「御酒屋」の榎森と岩井、町の酒屋としては国分町の菅原屋と二日町の浅賀屋あたりが有名どころでした。

しかし、明治に入ると新たな造り酒屋が評判を呼びました。明治十五(一八八二)年の「仙台人物見立一覽表」が仙台の酒造家として名前を挙げたのは、老舗の造り酒屋ではなく、伊澤平蔵という人物だったのです。

伊澤平蔵は、天保九(一八三八)年に宮城郡笠神村(多賀城市)の農家に生まれ、哲右衛門と名づけられました。若くして伊澤屋へ奉公に出た哲右衛門は、温厚、かつ勤儉な人柄を見込まれ、多くの奉公人の中から選ばれ、二四歳で伊澤屋の婿養子となりました。哲右衛門が婿養子となった当時、伊澤屋は、大きく商売を伸ばし、安政四(一八五七)年に御軍用酒屋として清酒の醸造を許されたばかりでした。御軍用酒屋とは、藩の軍備に充てるという名目で、通常の酒造免許よりも多額の献金と一定量の酒を藩に納める代わりに、不作の年でも酒造制限の対象外となる特権を与えられた、特別な免許でした。伊澤屋は、この御軍用酒屋という特権を得て、さらに藩

人望を集めた実業家へ

への献金を重ねて、苗字帯刀を許されるなど、一躍仙台でも有数の造り酒屋となったのです。養家を継いだ哲右衛門は、養父の名である平蔵を襲名し、家業に励みました。時代が変わって、酒造に対する制限が緩和されたことも追い風になりました。その結果が、「仙台人物見立一覽表」への登場でした。

同時に平蔵は、酒造業で得た資金で土地を集め、それが明治期の地価高騰によって大きな富となり、明治一〇年代には仙台有数の資産家として知られるようになったのです。

新興の経済人には、えてして強引さや個性の強さが見られることがあります。平蔵はむしろ、温厚、円満な人柄で信頼と地位を獲得しました。伊澤家は各地に田地を保有する大地主でもありましたが、凶作時には、小作料を免除するだけでなく、資金や米を援助するといった措置を採りました。平蔵はこうした社会貢献には財を惜しまなかったそうです。

資産だけでなく、その人柄からも人々の信頼を得た平蔵は、市議員・市参事会員・郡議員・県議員など、地方政治の場に引っぱり出され、ついには貴族院議員にも選任されました。経済界でも、平蔵を頼りにする声は強く、仙台商業会議所の第三代会頭になり、晩年には七十七銀行頭取にも推されています。明治四十四年、平蔵は惜しまれながら七四年の生涯を終えますが、彼の地位と信頼は後継ぎの平左衛門に引き継がれ、伊澤家は仙台の実業界を引き続いて牽引していくのです。

「仙台城下町人列伝」「明治実業家列伝」と続いた連載は、今回で一区切りとなります。長い間の愛読、有り難うございました。

仙台市史

好評発売中

通史編6 近代 1

明治時代の仙台 近代化とそのくらし

◆A5判 520頁 オールカラー ◆定価3000円(本体2858円)



明治時代から昭和初期にかけて使われた仙台市役所(「仙台名勝写真帖」より)

お求め先 県内主要書店・仙台市博物館/楡宮城県教科書供給所 TEL.022-235-7181 FAX.022-235-7183
お問い合わせ先 仙台市博物館市史編さん室 〒980-0862 仙台市青葉区川内 26 番地 TEL.022-225-3074